



# フェノロサ夫人の

## 東京日記

Apr. 1897 - May 1900

村形明子 續

平田祐子 画



を鳴らしながら庭を蓮池へと向かった。私たちは蓮花を賜うことを願った。彼は慎重に一本を選び、その大きな半開の蕾を下向きに携えて私たちの方へやって来た。彼は人工池を横切る大きな石のところまで立ち止まり、足の泥を洗い落とした。魚が驚愕して跳ね回った。そこから彼は再び歩を進めたが、私たちの方向ではなかった。蕾を、たぶん何かの厨子の前の花瓶に入れて手向けるべく、方丈へ運んだ。

まず赤い門を通り大仏へ向かう。金網で護られた祭壇の仁王が守護する。何百回と唱えられた祈りが未だにまといついている。門内広場に、先に紹介した但し書と大仏周辺の環境保存への協力要請が掲げてある。門からまっすぐに大仏の聖地へ導く参道は、一直線の石の歩道。その縁に松が数本生えているが、おそらく過去十五年以内に植えられた若い樹々。それらは参拝者が近づくと、大仏を隠しすぎる。

門内左手には、芝土に覆われた土手の竹林がある。それから美しいが、むしろ寂しい白蓮の池。春に満開だった若い桜の園がある。跳ねる魚で一杯の人工池は、寺院の大きな基石を飛び石に渡す。見事に刈られた植栽、土手に近い生け垣、幾つかの石彫を見ながら、一

### 三十一、早朝の散策〜大仏と蓮(続)

八月二日(土)

着替えをした僧がキモノ(着物)の裾を帯にたくし上げ、俗人並みに痩せさらばえた脚を露わにして、鉢

段と高い地点に到達した。門のすぐ右手には、しゃれた茶色の柴垣の門のある小さな店と大きな空洞の円筒状に刈って東屋にした、わが家の黄花粉に似た大木がある。さらに、古い古い梅林——衰え、瘤だらけの——は満開の時見たいものだ。

それを抜けると、半ば菖蒲、半ばピンクの蓮に覆われた池——「鈴木」春信がよく描くような小さな木の橋で二分されている。真ん中に磨かれた円卓と固く高くとても座れない円形のベンチのある、小さな東屋がある。このちよと奥に方丈の裏が見える。

そこからいよいよ大仏の聖域、そこへ導く三、四段の石段である。左手に見映えよく刈り込まれたソテツ(蘇鉄)、右手に手拭いの供えられた小さな手水屋、周りには寺院の大きな基石、そして私たちの頭上真近に素晴らしい大仏。その昔寺院の深紅の柱を支えた巨大な基石は、大仏の周囲を二重の正方形で囲み、白砂の上、一、二フィートの高さから影を落としている。大仏周辺と背後を元気のよい小さな桜林が囲む。その外側に樹木と茂みの高い塀があり、その彼方に

は傾く松がまばらに生えた丘が二つ。大仏のすぐ傍に大木が二本——傾いた松とまっすぐな長い幹とグロテスクな枝を持つ樅の一種——がある。いずれも大仏に顔負けしている。

### 三十二、別荘の高嶺家との交遊、海水浴場

アーネスト来る

九時頃——午後一時と思われた)一同打ち揃って高嶺家へ表敬訪問。小さな太ったダンナ(旦那)は驚異的に涼しい二階の部屋でデッキチェアに座り、英文雑誌『フォートナイトリー・レビュー』を読んでいた。T夫人はすぐ上がって来た。ハンサムな快男児の「長男」が小さなせいを海水浴に連れ出した。彼は雪白のフンドシしかまもっていなかった。せいは小さなスリッパに大きな麦藁帽子。彼は幼い妹に優しく、とても可愛がっているらしい。美しい光景。

私たちは階上で西瓜をご馳走になった。高嶺家の井戸で二日間冷やされた西瓜はまるで氷のようだった。